

序 説

近年、核医学診療の領域において提唱されている概念に「theranostics」がある。現在は一般に「治療(therapy)」と「画像診断(diagnostics)」のかばん語(混成語)として説明される単語であるが、その名が指し示すとおり1種類の薬剤に特性の異なる放射線を放出する核種を結合させることで病変の診断や局在といった「画像診断」とそれらに対する放射線による「治療」を両立させるという考え方である。

わが国において核医学診療は50年以上の歴史を有し、この用語こそ用いられていないものの、薬剤の体内動態を活用した治療法として甲状腺疾患に対するヨウ化ナトリウム、悪性リンパ腫に対するイブリツモマブチウキセタン、骨転移に対する塩化ストロンチウム、塩化ラジウムなどが行われてきた。

近年、製薬技術の進歩により新たな核医学製剤が次々と開発され診断、治療の両面において活用されるようになってきた。対象疾患が拡大したことで多くの診療科から核医学診療は再び注目を集めており、日常診療においての需要も大いに高まっている。

一方で急速なアップデートに対し情報を入手する機会は限られており、また対象疾患の領域が多岐にわたっていることからさまざまな情報が一手に集まった成書も存在していないのが現状である。

そこで本特集では現在わが国で保険収載されている内用療法[放射性ヨウ素内用療法、ペプチド受容体放射性核種療法(peptide receptor radionuclide therapy: PRRT), ^{131}I -MIBG内照射療法]に加え、近年治療に直結する検査法として新規導入されたアミロイドPET、そして2025年9月に治療製剤が承認され、今後保険収載が期待される前立腺特異膜抗原(prostate-specific membrane antigen: PSMA)について、核医学診療のエキスパートによる知見をまとめていただいた。加えて、本疾患を日常的に診療し、内用療法に期待を寄せている各専門診療科医にも現状や治療の意義、適応について解説していただいた。

本特集が日常で核医学診療に従事される先生方の知見を深めるものとなることに加え、これから新たに内用療法の導入を検討される先生方にとって有用なものとなることを期待する。

松尾政之